まだ見ぬ強さ

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まだ見ぬ強さ

【Ｎコード】
Ｎ０８１６Ｂ

【作者名】
緋翠

【あらすじ】
小さい頃母と兄を黒ずくめに殺された主人公、タカ。そんなタカが仇を取ろうと決意し、腕を磨いていた。そんなある日、とても高価な指輪を拾った。その指輪を通して時折聞こえてくる声―。何故か、仇という目的から外れてしまったタカは、無事仇を取れるのか！？

序章

「兄貴、剣の稽古してくれないか？最近全くしてなかったから、なまっちまってさ」
タカは、兄のミツルに頼んだのだが、ミツルは少し、悲しい顔をした。
「タカ、どうして強くなりたがる？その強さをどうするんだ？」
そう言って、ミツルはタカの顔をじっと見た。
「もちろん、守りたいんだ！兄貴や、みんなを！」
「…そうか。だが、自惚れるなよ、己の強さに」
ミツルはタカに、言い聞かせるように頭を撫でながら、優しく、けれど強く言った。
「…分かってるよ！だから、稽古をつけてくれよ、兄貴！」
タカは、そんなことはいいから、早く稽古をつけて欲しかった。
ミツルは仕方ないと呟き、二人は裏庭へ向かった。
「タカ、そろそろ終わろう母さん達が心配する」
ミツルは、沈む夕日を見ながら言った。
「うん！俺、腹ぺこ！」
タカは待ってましたと言わんばかりの声で答えた。
「ただいま」
「たっだいまー！」
タカとミツルは、そう言って靴を脱いだ。いつもなら母が来るのだが、どうしてか今日は来なかった。代わりに母の悲鳴が聞こえた。
「母さんの声だ！」
タカとミツルは急いで台所へと向かった。　そこには黒いロングコートを着た男が立っていた。手には血で紅く染まった、細身の剣を握っていた。
「お前！よくも母さんを！おおお…！」
タカは男に剣を向け走った。男は剣をタカに向け、構えた。

「よせ、タカ！……！」

タカに刺さる直前ミツルは、覆いかぶさるようにタカを男の剣から守った。

ザシュという音がした。タカは一瞬何が起こったか解らなかった。だが、鉄臭く、手に付いた紅い、血。その瞬間、タカは言葉にすることなく絶句し、気絶した。

一章

あれから十年の月日が流れた―

「でや！」

どんという音がし、タカはよっしゃ！と呟き、後ろを振り返った。

「ありがとうございます、魔物を退治してくれたおかげで、わしらは平穏に暮らすことが出来ます」

今まで不安そうにしていた村長は、安堵しタカに礼を言い報酬を渡した。

二日前タカは掲示板を見て、魔物退治を依頼した村長を訪ねた。

話を聞きそして魔物の住み処へ着いたタカと村長だった。そして今ターゲットとなる魔物を退治し終わったのだ。

「よかったな！またなにか困った時は、頼ってくれよな！ただし、有料だけどな」

タカはちゃっかりと報酬を貰い、片手を挙げ嬉しそうにその場を去って行った。背中には魔物を縛っているロープを背負う形で、魔物を引きずっていた。

「おいおい、タカこりゃまたでかい奴を引き受けたな」

タカは魔物を引きずり、ハンター本部へ向かった。着いた途端同業者の男に言われた。タカはにっと笑い答えた。

「へへ！強くなりたいからな！」

こんなやり取りはいつもの事だった。でもタカは嬉しくもあったのだった。

「なぁ、これくらい物があれば金になるよな！それにこれ！」

タカは魔物が落とした物（貿易品）を男に見せ、そしておもむろ

に大事そうに懐からある物を出した。「ほお～こりゃまた…」
「どうだ？これ凄くないか？」
「ああ。だが、魔物がこんな高価な指輪を持ってんの、おかしいが…」
男はタカから指輪を受け取り、眺めた。そしてあるものを。見つけた。
「こりゃなんだ？……古代文字っぽいな」
「ん？あ、ホントだ！…クロじいの所行って聞いてくるよ！」
「あ、ああ。残り換金しとくな」
タカはそんなありがたい台詞を聞き、笑顔で振り返り手を降り長い廊下を走った。

二章

「ほう…珍しい客だな。しかも似つかない物を持っておるな」
「何だよ～クロじい、似つかないって」
タカは指輪をクロフォードの所に持って行った。
クロフォードは、とにかく昔の事をよく知っている爺さんだ。若い頃（四十ぐらいまで）世界を冒険していたらしい。
「ほっほっほ。そのままの意味じゃ。どれそれを見てほしいのじゃろう？」
「あ、うん。古代文字っぽいのがあるって」
タカはクロフォードに指輪を渡した。クロフォードは指輪を眺めて、文字を見た。
「ふむ。心して聞くのだぞ。…アグライア…輝きという意味じゃな…どこかで聞いた名じゃな。さて、と」
クロフォードは指輪に彫られた文字を読み、名前を口にした。そして目をつむり集中する。するとそれに呼応するかのように指輪が光り出した。
「この指輪を見つけ、この文字を読める方。私を助けてください、リキュール宮殿に助けに来て下さい…ふう…久々にこれをやると堪えるな」
タカはクロフォードが指輪から詠み取った意味を必死に考えた。
「リキュール宮殿とは、今は亡きフィール皇帝陛下の宮殿じゃ。ふむ、思い出したわい。アグライアというのはフィール皇帝陛下の幼なじみじゃ」
「幼なじみか…どんな人なのかな」
タカはハンター本部の屋上で寝転がり、荷物を枕代わりにし指輪を陽にかざしながら眺めていた。
「う～ん」

考えている間に指輪を握った手が胸の上に落ち、いつの間にかタカは深い眠りについていた・・・・・

三章

†　†　†　†　†

タカは片手に短剣を意地でも離すまいと握り、倒れていた。目の前には母と兄の体が横たわっていた。二人の顔を見てそして黒服の男を見上げた。その顔は無表情ゆえに怖かった。

「っ！！」

「もし仇を取るというのなら、覚悟を決めろ」

黒服の男は倒れているタカを見下ろし、言った。

男は剣をタカに向けた。そしてタカの胸へ吸い込まれるように・・・突き刺さった。

†　†　†　†　†

「うわあぁぁ！！」

タカは跳び起きた。荒い息をし胸を押さえた。

「はぁっはぁっ・・・ゆ、夢・・・・・・」

嫌な汗をかいたことに気付いたタカは、一度深呼吸をし悪夢にうなされていたにも関わらずに、握っていた指輪を見た。

「リキュール宮殿か・・・」

タカはクロフォードの言った言葉を思い出して、気付いた。

「やばっ！次の仕事忘れてた！急がねーと！」

急いでタカは指輪を胸ポケットへ入れ、枕代わりにしていた荷物を引っつかみ、駆けて行った。

「男を探してる？」

「はい・・・。魔物退治の掲示板に嘘を提示すのは、いけないのは分かってるんです。けど・・・」

タカが受けた依頼は、魔物退治の依頼じゃなく人探しの依頼だった。
「・・・魔物退治用の掲示板しかないって思ってるよな？あのな、本部の受け付けに行けば、退治以外の依頼ができるんだぞ？」
タカは少女が知らない大事な事を伝え、少女の顔は驚いた表情をし、今度は赤くなった。
「ごめんなさい！私、そんな事知らなくて・・・」
「ま、知らないなら仕方ないけど、次からは気をつけろよ！」　少女の言い分を聞き、笑顔で返したタカ。そんなタカに少女は今度からは、気をつけます！と答えた。
「うし！まー引き受けちまったから、内容を聞かなきゃな！」
少女の依頼は男を探して、剣を渡してほしい。
その男は旅人らしく、傷を負っていたところを少女が見つけ、親に頼み自宅に運んだ。その際に運び忘れた剣を渡してほしいとのことだった。
「なるほど。んでそのおっちょこちょいの男の名前は？」
今までのいきさつをざっと説明され納得したタカは、今度は男の事を聞いた。が、少女は俯(うつむ)いてしまった。
「そっか、知らないんだな。んじゃあ、どんな格好だったか覚えてるか？手掛かりならなんでもいいぜ」
タカは俯いた少女を気遣い軽く言った。
「あ、えっとそれなら！黒服っていうか、黒いロングコートを着ていて、目は確か右が青で左が紫でした・・・あ、あのタカさん？」
少女が説明していく程タカの顔色は真っ青になっていった。
「・・・見間違いんじゃないんだな！？」
行きこみタカは少女の肩を強く掴んだ。少女は少しうろたえた。
「は、はい。印象が強かったからはっきり覚えてます」
―あいつだ！母さんと兄さんを殺した奴だっ！！

四章

「絶対見つけだしてやる！そして仇をうつ！」

二日前にタカは少女から依頼を引き受けた。依頼内容は黒いロングコートの男を探してほしい、とのことだった。

詳しく男の事を聞くと、十年前にタカの母と兄を殺した男の風貌が一致した。

タカは仇を取る為の強さと男の情報を得る為にハンターに、なったのだった。そして今、仇である男の手掛かりを見つけ、男を追っている最中だった。

「そろそろ日が沈む・・・仇を取る前に傷でも負ったら危険だな・・・」

夕日を見ながら走っていたタカは、先にある村に視線を変えた。

「野宿って訳にもいかないし、あの村で休もう・・・」

「へぇーあんたハンターなんだな、若いのに大変だなぁ。しかしこんな暑い所でロングコートなんて着るばかはいないって」

村に着いたタカは宿へ向かった。宿は思ったよりも早く見つかったので、時間を有効に使い男の情報収集へと行動を移した。

この村では宿と酒場が一緒だったから案外早く男の尻尾を掴めると思ったのもつかの間。この中年の男で十余人目だが、めぼしい情報は一切なく、皆同じ答えが返ってくるのだった。「そうか…ありがとな、おっちゃん」

「いや、力になれなくてスマンな」

ほとんどの人がいい人だから、逆に済まない気持ちになっていたタカであった。

「仕方ないな。もう夜中だし明日にして、も、寝よう。眠いし」

タカは一度伸びをして寝床へ向かうため二階に上がる階段を目指

した。その途中に先程話した男が大きな声をあげ、タカを引き止めた。
「ど、どうしたんだ、おっちゃん。ビックリしたじゃん」
「ああ、それは悪かった！いやね、思い出したんだよ、その男の事を！」
タカの眠気は一気に吹き飛んだ。

五章

「思い出したってホントか、おっちゃん！」
勢いづいたタカは中年男（名をヒロというが）の肩をわし掴んだ。
「ああ！確か一週間ぐらい前だと思うが・・・
目の色が変わってたからここらへんをたむろしてる奴らに、絡まれてたんだよ。でも余裕って感じで相手してたな～」
ヒロは思い出して、しみじみしていた。タカは痺れを切らしたように言い放った。
「だーもう！しみじみしてないでそいつの名前とか、どこ行ったとか分かんないのかよ！」
「ん、ああ、すまない。名前は確かフィルっつてたな。そんで、リキュール宮殿に用があるって・・・て、おい坊主？」
「リキュール宮殿にあいつが・・・！」
そしてタカは必ず仇を取ってやると、再度誓った。

名前さえ解らなかった男の名前を聞いた時タカは少し引っ掛かった。
「フィル・・・フィル・・・」
タカは宿のベッドで男の名前を復唱していた。考えてる間にまたタカは眠りについた。

「・・・っ！？はぁっはぁっはぁっ・・・ま、また同じ夢・・・くそっ！」
タカは悪夢を見て、大量の汗をかいた。しかしいつもとちょっと違った気もしていた。
「・・・ふぅ。体、動かそ。嫌な気持ちも飛ぶかもしんないし・・・」
タカは言い、寝間着から普段着に変え、剣を取り真夜中の村を歩

いた。
「まるで、リーブス村みたいだ・・・」
リーブス村とはタカ達家族が住んでいた村だ。
「あれから十年経ったんだな・・・そういえばあの指輪の持ち主のアグライアだっけ、どうしてんだろうな」
タカは鎖を持ち上げ、月の光に照らされている指輪を目を細めて見た。
タカは指輪を鎖に通し、首に下げていた。こうすれば戦いの際等で落としたりしないと判断していた。
急に指輪が月明かりと呼応し淡く光りだした。

五章（後書き）

少し更新が遅れましたが、どうだったでしょうか？
もしよろしければ感想をいただけると今後にもつながると思うので
よろしくお願いです！

六章

指輪が淡く光だし、熱をもった。
「な、なんだ！？」
―誰か！お願い、私を、彼を助けて！！！―
「な、ななな！？ゆ、指輪がしゃべった！？」
タカは何がなんだか分からなくなった。そしていきなり村の外から異様な空気が漂い始めた。まるで指輪の声（？）の元へと集まるかのように・・・。
「なんなんだよいったい！！てか、魔物の気配だよな、これ！こんなにたくさんの気配・・俺一人じゃ・・・くそ！」
タカは一度諦めたがこの村を見捨てることもできずにいた。例え一人じゃ倒せなくても少しでも倒すことができれば良いと、タカは思い一気に村の外へと駆け出した。

「う、うお！？い、居過ぎじゃねぇーか？・・はは、一人で倒すのか・・・」
そう言いタカは戦闘体勢へと入った。
「はぁっはぁっはぁ・・・・・な、何体いんだよ・・・っ」
かれこれ一時間近く戦っていたタカの体力は限界に達していた。そしてタカはふらつき遂に倒れてしまった。
絶体絶命。タカは覚悟を決めた・・・魔物にやられる覚悟を。
「・・・お前はここで倒れるのか」
そんな声が聞こえ、薄れゆく視界に黒服の男が現れた。
見たことのある男だとタカは思った。

「・・・・・・・そ・・・か・・・ん？」
「んあ？おっちゃん？なんで俺・・・確か」
目の前にヒロが居て、その隣には黒服の男がいる・・・。

「あ、ああ?!お前!!」
「私の名前はお前などではない。それに年下の奴に呼ばれるのも不愉快だ」
　このままにしておくとタカが怒り出して、手に負えなくなるかもしれないと考えたヒロは割り込んで、タカが気絶した後を男を交えて詳しく話した。
「俺は酒を飲んだ後家に帰ろうと店を出ようとしたらこの、フィルが来たんだ」
「・・・私は剣を探しに来た道を戻ってこの村に来た。が、どうやら君が俺の剣をかっさらったようだな」
　剣を持ち上げながら説明するフィルの言い方が気に入らずにいたタカは、反発するように言った。
「俺はその剣を、お前が助けた女の子に依頼されて剣を渡して、報告して任務完了だったんだよ!なのにかっさらったってのはおかしいだろ!!」
「・・・任務?依頼?・・・そうか君はハンターなのだな」
「・・・・?お、おい、フィル?さっきそう言ったよな、俺。坊主はハンターで、お前の事探してたって」
「覚えていない」
　なんともマイペースなフィルだった。
「それよりもお前、十年前のリーブス村の事覚えてるか?」
「リーブス村の十年前のこと?」
　タカは復讐という目的でこの男を探していたのだ。
「確か十年前は、ある家に向かい・・・」

七章

「私はある家に向かい・・・そうか、君はあの時の」
「やっと思い出したな！そうさ、俺は」
「兄の後ろをくっついていた泣き虫君」
「ちゃう！俺はそんなに泣き虫じゃなかった！てゆうか、それ俺じゃなし！」
フィルの話を折ったタカであったが、フィルもまたタカの話を折ってしまった。そしてタカとフィルが嫌な顔をして見詰め合っている光景を見てヒロは真面目な顔で一言。
「・・・・お前ら話が噛み合ってないって」
「んだよ、おっちゃん！」
タカは機嫌悪そうにヒロを睨んだ。フィルは少し呆れた顔をし、テーブルにあるカップ（中身はブラックコーヒー）を一口啜った。
「いや、悪い悪い。しかし、フィルも坊主も人の話は最後まで聞くもんだぜ？特にあんたらの場合はな」
ヒロはタカとフィルを見て、言った。そんなヒロにタカは文句を言った。
「説教かよ！というかいつまで坊主って呼ぶ気だよ！」
そして先程から気になっていた事を口にした。その言葉を聞いてフィルは少し眉をひそめて、カップをテーブルに置き、言った。
「その言葉、そっくり君に返そう。私にはちゃんと名前があるのだからな」と。
タカにとっては不利な状態だった。なんせヒロとフィルの二人に睨まれているからだ。
タカは俯き、声を荒げることを我慢した。そんな事をすれば自分が子供みたいだと思ったからだけではなく、冷静さを欠くとどんな事になるか、ハンターの先輩に教わったからである。だが、どちらかといえばタカの心はこのまま引き下がりたくはない、という気持

ちが強かった。
「俺は・・・敵の男の名前なんて呼べるか！！」
「・・・なるほどな。お前はなんの覚悟もなしにハンターを、いや敵討ちをしている事がわかった。認めるという心も例え復讐者だとしても、必要だ。それを出来ないという事は、まだ子供で、覚悟もない、ということだ・・・」
フィルは言い切った。
「な！覚悟って・・・」
「覚悟もなしでは何も救うことはできない。自分の心も、殺された者の心も、な」
フィルはこれでこの話は終わりだと言い、椅子から腰を上げ、細身の剣を取り部屋を出た。
タカはフィルの背中を呆然と見ていた。いや、正確に言うと見る事しか出来なかった。それは、言い放ったフィルの顔は苦痛に似た表情だったのだ――――

八章

「・・・その、フィル。あんた、リキュール宮殿に用があるんだろ？」

タカはあの日以来、フィルの顔を見れずにいた。だが、フィルの名を呼べるようになったのは少し進歩したと言えるだろう。

「・・・・・そうだが、何故知っている？」

「ヒロのおっちゃんから聞いたんだ。それで俺もリキュール宮殿に用があるん・・だけど」

タカは最初は前を見ていたが、後になるにつれて、下を向き始め、言い淀んだ。頭を下げたくないのだが、指輪のことも気になる。意を決してタカはフィルの顔を真っ直ぐ見た。フィルはタカの決意を立てようとし、次の言葉を待った。

「俺も連れて行ってくれ。行きたいんだけど道は分からないし、聞いても行かない方がいいって言う人ばっかで」

「・・・そうか。今のお前では確かに、あの場所まで行くには問題ありだな」

タカは、ちょっとむくれた。が、当たっている事だけにタカは言い返すことができなかった。だが、連れて行ってくれることを許してくれたことには感謝した。

「明日の早朝にこの村を出発する。今日のうちにお前が必要だと思うものなど用意しておけ」

タカはフィルの言葉に真顔でうなずき、そのまま部屋を出て、店へ駆けて行った。

フィルはさてと、と呟き剣を右手に黒いロングコートを左手に持ち、宿を後にした。

「必要な物っていったら・・・やっぱ、薬草だよな。後は、水と食料と・・・後は・・・・・」

タカはフィルの言葉を真意に受け止め、必要な物を揃えようと村を歩きながら何か必要かを考えていた。

「何の用だい？」

「用？決まっている。貴様は一体何を考えているのか、それと幾つか質問がある。それの答えを聞きたい」

フィルは今、村のはずれにある遺跡にいた。この遺跡はどうやら、住むための物ではなく何かの儀式に使われていたようだ。

そこにグレーのフードを深くかぶり、同じくグレーのマントを羽織っている男―と思われる―がいる。

フィルの言葉を聞いた男の肩が揺れた。どうやら笑っているらしい。それを見たフィルは器用に片眉を上げた。

「何が可笑しい？」

不機嫌なフィルの顔を見ながら、男は面倒くさそうに答えた。

「はぁ。俺が何を考えようが旦那には関係ないぜ？」

「・・・知っとく必要はあると思うが？ふぅ次の質問にいこう。貴様は何故タカを殺さなかった？殺せるタイミングはいくらでもあったはずだ」

フィルは気になる事を構わず続けて質問した。

「それとリキュール宮殿の何を隠しているんだ？正直に答えろ」

男は近くにある手頃な石に腰掛け、質問を聞いていた。そして質問が終わった事を確かめ、フィルの顔を見ながら答えた。

「そうだなぁ・・・坊主のことは、坊主を殺したらあの指輪がまたどっか行っちゃうし、旦那の反応ってのを見てもバチは当たんないかな？って感じだな」

「用は暇つぶし、あるいはただ自分が楽しみたいだけか」

フィルの言葉を聞いて男は一瞬言葉を失った。

「痛いとこくるねー暇つぶしって、まっいいか。あと宮殿の事は直接その目で見たほうが早いぜ。じゃそろそろ俺は帰るぜ」

男は言うや否や姿を消した。フィルは男が座っていた場所を見つ

めながら、ポツリと言った。
「答えになっていないが、まぁいいか。そろそろ戻ったほうがいいな」
フィルは黒のロングコートを翻(ひるがえ)し、村へと戻った。
その頃タカはというと、フィルが謎の男とやり取りをしていた中、財布と相談しながら、店の主人に食料などの値引きをしていた・・・。こっちはなんとも平和なやり取りだった。

八章（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！
八章どうだったでしょうか？感想をいただけると嬉しいです！

九章

「はぁ、はぁ、はぁ・・・いつまで続くんだよ、この砂漠は！！」
タカは日差し避けのマントを被り、大量の汗をかきながら呆れとも怒りともいえる顔で言った。

村を出てフィルの道案内通り、二人はリキュール宮殿へと向かう為に通らなくてはならないルルカ砂漠を歩いていた。
タカの数歩前を行くフィルは砂漠だというのに、黒のロングコートを着ていた。見るからに暑そうだが、着ている本人は涼しい顔している。そして急に立ち止まった。
「魔物が余り出ないだけマシだろう。少し先にオアシスが見える。そこで少し休むぞ」
タカが追い付いてからフィルは先を指差し、またさっさと先へ行ってしまった。そんなフィルの背中を見ながらタカは、一生懸命フィルに追い付こうと砂に動きを奪われている足を叱咤（しった）して、動かした。
先にオアシスに辿り着いたフィルは情報収集にあたり、タカは少し奥にある噴水を目指し歩いていた。歩きながらこのオアシスを眺めていた。周りには自分たちと同じ旅をしている人たちがいて、このオアシスを拠点にしてテントを張り、商売をしている者も多くはなかった。そこうしている間に噴水に着いた。まずタカがしたことは、マントから顔を出し、顔を噴水に頭から突っ込んだ。
「・・・・・ぷっはぁっ！！気持ちー、やっぱこんな暑い場所に来て、水を見つけたらこれやらなきゃな」
「まったく噴水にそのまま顔をつける奴がいるか」
フィルはタカを追ってきてタカの行動に呆れた。そして噴水に近寄り手を水につけ、すくい顔にかけた。
「・・・ふぅ、予定を変更するぞ。今日はここで一泊する。運悪く

砂嵐が来るそうだ。もうすでに宿は手配してある」
ポケットから麻布を取り出し、顔と手を拭きながらフィルは言った。タカはうげぇ～と言い、嫌な顔してフィルを見た。
「なんだ？私に文句を言われても私にはどうにもできなぞ。それとここには小さな宿しかないから同じ部屋になる」
「・・・・！！」
タカは崩れた。タカの周りだけ冷たい風が吹いた、気がした。そんなタカを見てフィルは眉をひそめたが、気にせず集めた情報をタカに一部分教えた。
「リキュール宮殿にはアグライアという女が何者かに幽閉されているらしい。宮殿に盗みに入った者が命からがらここまで、逃げてきたらしい。その男が言うには、まるで魔物が意思を持ち女を人質をとっているようだ、と」
「・・・・それっておかしくないか？」
タカは無理やり立ち直り、フィルの話に気になることを見つけ言った。
「やはり君もそう思うか。そう魔物はただ、己にある欲を満たす為だけに人を襲う。そして独断で行動する習性がある」
二人は神妙な顔つきで黙ってしまった。周りにいた旅人は不穏な空気を察し、その場をそそくさと去っていってしまった・・・・・・。

十章

タカとフィルは分からない事を考えていても、どうしようもないので食事を終わらせ、少し早いねむりについた。が、フィルは壁に寄りかかった状態で眠っているが、タカは目を開けていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。眠れねぇ～」

タカはむくりと起き上がり、頭をかき、フィルを起こさないように外へと向かった。

「はぁぁぁぁ、何でこうなったんだよ・・・もとはと言えばあいつが・・・はぁ」

タカは外に出た途端長い溜め息をついた。難しい顔をしてから、気を紛らわそうと少し歩くことにした。

何も考えずに歩いていると、水の音が聞こえてきてタカは顔を上げると、少し先には、昼間顔を突っ込んだ噴水があった。タカは噴水まで行き囲んである石に座った。

しばらく何も考えずにぼけっとしていたタカであったが、急に思い出したように首に下げていた指輪を出した。そしてしばらく指輪を眺め、不思議に思った。

「・・・前までなら眺めている最中に、声がいきなり聞こえたんだけど、今日に限って聞こえないんだな・・・」

呟き指輪をしまった。一度伸びをしてからタカはもう一度噴水に顔を突っ込んだ。

夜の砂漠はとても冷えるのが当たり前なのだが、最近は夜も暑いのだという。とはいっても昼間ほどではないが。

タカは顔を勢いよく上げ、滴を散らしながら

「うっし！あいつの事は気に入らないけど、あいつが居なきゃリキュール宮殿に行けないからな。我慢しろ、俺！」

タカは自分に言い聞かせるように言い、宿へ戻った。

その後タカは風邪を引かないように濡れた顔と髪を念入りに拭いて、深い眠りについた。
フィルはたかが眠りについた途端目を開け、タカをしばらく見つめながら、剣に触れそしてフィルもまた眠りについた。

そして真夜中では、自然の風が牙をむきこのルルカ砂漠全土を襲った。沢山の砂が、風が舞う中その先にあるリキュール宮殿で、少女は悲しみの顔を浮かべ愛しい人を想い今夜も涙を流すのであった。

十章（後書き）

読んでくださってありがとうございます
はい、もう二桁です！初投稿での物語、二桁・・・・頑張りますのでよろしくお願いします。
感想をいただけると嬉しいです。

十一章

大嵐の翌朝には眩しい太陽がさんさんと砂漠を照らしていた。
オアシスにあるレンガ造りの宿屋の二階の一室にはタカとフィルが居た。
「あ、おはようフィル。早いな」
おはようには少し遅い時間に、目覚めたタカは寝ぼけ眼でフィルを見つけ、挨拶をした。
「・・・・・ああ。しかしタカ、君はいつまで寝る気だ。もう昼近いぞ、出発が遅れている」
明らかに露骨(ろこつ)な顔をして一応挨拶したフィルは、椅子から立ち上がりタカの剣とマントを取り、タカに渡した。
タカは渡されて少しびっくりした。
「え？何？もう行くのか！？飯とかは！？」
はぁ・・・とフィルは呆れた顔をし溜め息をついて、部屋の扉へ向かいながら言った。
「・・・一階のホールに用意してもらっている。・・・荷物をまとめて早く来い」
フィルは部屋を出た。タカはなるほどと呟いて頷き、お腹が壮大な音が鳴るとフィルを追って、というよりは
「待ってろよ、朝飯兼、昼飯！」
などと言い、どたばたと階段を下りていった。

「ふぅん。じゃあ、こっから四日くらいなんだな」
タカはフィルとご飯を食べながらフィルの説明を聞いていた。説明している内容は、オアシスから次の中間地点までの村までの事だ。
「ああ。私だけならば二日くらいで着く。が、君も居るのだからその倍、いやもしかしたらそれ以上になるかもしれないな」
フィルは厭味(いやみ)ではなく事実を（フィルにとってのだが）口にした。

「んな！っ・・・・・・・・」
タカは聞き捨てならないという顔でフィルを見た。反論しようとしたが、ここで反論したら負けだと思いタカは黙って、ご飯を食べ続けた。
（ほう・・・言い返してこなくなったな。少しは成長した、という事か）
フィルはタカの様子を見てタカを少し認めた。前よりも一回り大きくなり、我慢強くなったことを心の中で褒めた。
「さて、そろそろ出発するぞ。急げば夜までにはこのルルカ砂漠を越えられる筈だ」

そうしてまた、タカとフィルは旅立っていった・・・・

十一章（後書き）

どうだったでしょうか。まだ先は長いですが、タカや、フィルそして作者を見守ってやってください。
感想または意見がありましたらください。

十二章

タカとフィルはルルカ砂漠を歩いていた。
「後もう少しで砂漠を越える。ほら、水だ。それを飲んだら行くぞ」
フィルはタカに水筒を渡した。タカは受け取り喉を鳴らしながら水を飲んだ。フィルはタカを見遣(みや)って一つ頷くと、声をかけた。
「よし、大丈夫だな。このままのペースで砂漠を越える」
タカはそんな無慈悲な言葉を聞いて、顔を歪めた。
「いや、無理だって！俺、フィルのペースについて行けないって」
「・・・やれやれ。だがそんなに騒いでいられるということは、体力が有り余っているのだろう？しかし君は子供だからこのままのペースはきつい、か」
フィルはタカの言動が気に入らなかったのか、珍しく鼻で笑いいやみを言った。珍しく苛立っているフィルを見いたタカは、うろたえてしまった。フィルははっとして、タカから顔を背けた。
二人はしばらく無言のまま砂漠を歩いていく。フィルは後ろにいるタカを気づかい、追いつくまでペースを落とし、追いついたらペースを速める、と繰り返していた。タカは必死でフィルの後に続こうと歩き、時には早足で追いつこうとしていた。しかしハンターだろうと、鍛えていてもやはりタカは子供だ。
フィルはタカがぜいぜいと荒い息をしていることが分かった時点で、タカを落ち着かせるように、その場で休ませた。もちろんタカは否定したが、フィルが一言言うとおとなしくなった。
「正直、君の根性には呆れる。が、ここで倒れられたら私も困るし、君も困るだろう？仇が取れないのだから・・・・・だから休め」
フィルは言うや否や水筒を取り出しタカに渡した。
「・・・っぷは。なぁ、なんでレイバ村にいたんだ？」
タカは水を飲みながらふと疑問に思った。しかし、フィルはタカを見ようともせずに答えた。

「君には関係ないな」
一言・・・。タカはむすっとした顔になり、真面目に答えろよと呟いた。気配で感じたのか、フィルは諦め、嫌々答えた。
「・・・・・・納得しないか。仲間と一緒にやらなきゃいけないことがあった。これでいいか？」
「仲間？やらなきゃいけないことって俺の・・・！？熱っ」
タカはいきなり胸を押さえた。フィルは剣を構え、タカを守るように背を向けた。肩ごしからフィルはタカに喋りかけた。
「魔物の気配だ。悪いが痛みを感じている暇はない」
「わ、分かってるよ！って、う、うわああ！」
「おい！どうした！これは・・・・・」

十二章（後書き）

すいません？更新遅れました…本当にすいません！やはりまだ、完結には程遠いですが、あたたかく見守ってください。

十三章（前書き）

フィルが謎の男と出会います……今月二回目の投稿です……申し訳ありません。楽しんで下さい。

十三章

「大丈夫か、タカ」
少し砂漠を越えた頃、空は昼と夜との曖昧な色合いだ。
無事、夜前には砂漠を越えられた二人だったが、やはりあの魔物を倒しながら、フィルの速さで進んでついて行くのに、タカにとっては辛かった。
「だ、大丈夫だ！っはぁ、はぁ」
「大丈夫そうではないな、はぁ。もう少し頑張れ。先にテントが見える」
フィルは意地を張っているタカに呆れと共にほほ笑ましいと思った。途端不機嫌になった。
（・・・何がほほ笑ましい、だ。まったく彼といるとどうも調子が・・・）
「ん？どうしたんだ、フィル。フィルも疲れたのか？」
タカは少し暗い顔をしていたフィルの顔をのぞき、心配、というよりも、からかいが混じった声で聞いた。
「ふぅ。確かに疲れたな。・・・・いろんな意味で」
フィルは否定はしなかったが、最後に意味ありげな目をタカに向け、呟いた。
「なんか言ったか、フィル？」
フィルはタカの質問を無視して先へ進んで行った。
後ろでは「なぁ、なんて言ったんだよ！・・・・速いってば！」などなど、罵声が聞こえてきたがフィルは無視し続けた。
（ちぇ・・さっきから一言もしゃべんない・・・つまんねぇ）
タカは急ぎ足でフィルの背中を見ながら頬をふくらませていた。
するとフィルは急に立ち止まったためタカは背中に思いっきり顔をぶつけてしまった。

「いって！なんだよ、フィル！・・・・・おい、聞いてんのか！？」
タカは鼻を押さえながら、フィルに抗議した。が、フィルは前方を見て驚きの顔をしていた。そんなフィルを怪訝に思ったタカはフィルの見る前方を見た。
そこには一人の少女がいた。その格好はボロボロの麻布をまとっただけで、首には鎖が、両手首には同じく鎖がついていた。。そして後ろには深くフードをかぶってマントを羽織っている男とも女とも判断がつかない人が少女の傍らに立っていた。
「・・・ひ、ひでーまるで、奴隷だぜ。・・・・・おい、フィル？」
タカは少女を見て顔を背けたくなるのを堪えた。
フィルは怖い顔をして顔の見えない者に近づいていく。そして剣を握り言った。
「その少女を放せ。そして鎖も外せ」
フードを被った者はフィルの言葉を聞いているのか聞いていないのか判らない程、ゆっくりとフィルに背を向け始める。
「待て。聞こえていない訳でもないだろう？もう一度言おう。その少女を放せ。そして鎖も外せ」
しばらく男は立ち止まっていた。少女とタカは強張った顔をして、声を出せずにいた。
そしてフィルは我慢しきれずに動いた。
「あ、フィル」
「いや！」
タカと少女は同時に声を上げた。
「この少女はあなたと関係がおありですかな？」
そう男の声が聞こえきた。声の主は少女を無理やり引き寄せて、盾にしているフードを被った者だと判るに少し時間がかかった。フィルは驚き立ち止まった。
「お久しぶりですねぇ、フィル殿下。わたしの事をお忘れですか？」
男はいいフードをとった。その顔を見てフィルは、絶句した。

「っ・・・・！お、お前は！」
タカと少女は訳がわからない顔をして、立ち尽くしていた。

十三章（後書き）

どうでしたか？楽しんでいただければさいわいです…。謎の男の正体は次回のお楽しみということで…

十四章

あれからタカとフィルは、水と食料を確保するとすぐに、平野のテントを出た。その後の二日間二人は必要最低限以外は一言も喋らずにいた。

（フィルの事殿下って言ってたけど、まさかフィールって奴なのか？だーもう！気になるな！！）

タカはフィルの後ろを歩いて考え事をしていると、急にあたりに人が通り始めた。

「そうか、もうこんな季節なのか・・・。？ん、ああここら辺の地域の人々はこの季節になると、闘儀祭をやるんだ」

「とうぎさい？」

フィルは丁寧に説明をしようと考えたが、頭を振って簡単に説明した。

「闘儀祭というのは、その名のとおり、闘いの儀式だ。武道大会と思えばいい」

「あぁ、なるほどー。でもさ、闘いが儀式みたいなもんじゃないのか？なのに二度もぎ、なんて言葉使うんだ？」

「さぁな。私にもわからん」

二人は人を避けながら、先を進んで行く。しばらく経って、タカは我慢できずに、聞きたい事をフィルに聞いた。

「なぁ、さっきのえっとフード被ってた男が、あんたのこと殿下って言ってたけど」

「・・・君には関係ない」

「そんな言い方はひどいじゃないのですか、殿下」

どこから現れたのか、フードを被った男が建物の影から出て来た。その側にはあの時の少女がいた。あの時とは違い、首や手にあった鎖は外されており、服も上流階級の者達が着る様なとてもきれいで、丈夫な服を着ていた。

「・・はっ！あの時言ったはずだ。私の前に二度とその姿を現すな、とな。私は裏切りのお前の顔など見たくはないんだ」
フィルは最初高笑いをして、その次に今まで聞いた事のない低い声を発した。
タカと少女はぞくりと悪寒がした。男はおどけたような顔をして礼をした。
「申し訳ありませんね～。僕にとってはあなたが裏切り者なんですけどね～。っと、僕の用事はその子の用事でもあるんですよ」
男はタカの側にいた少女を指し、微笑んだ。
「あ、はい。そうでした」
初めて聞いたときは悲鳴だったから、少女の声をちゃんと聞いたタカは驚いた。
ガラスのように透き通った凛とした声が響き渡り、フィルは少女を振り返り見た。
少女はフィルに近づき、深く頭を下げた。フィルは困惑し、声を上げようとすると、少女が頭を上げながらにっこり笑った。とても幼く、それでいて大人びた顔だ。
「あの時、私のことを気づかってくれてありがとうございました。私、お礼を言おうとしたら、あなた方が旅立ったと、この方から聞いたため無理を言って連れてきてもらったんです」
フィルは拍子抜けして言葉を失った。少女は困った顔をした。タカは少し笑い、少女に話しかけた。
「悪いな。フィルは今、丁寧な態度とられて困ってんだよ。ま、別にかしこまんなくてもいいよ」
フィルはタカを睨んだ。タカは罰が悪そうな顔を一瞬だけして、少女を見て、二人は視線が合った途端クスクスと笑い出した。
（やれやれ、本当にほほえましいというか、なんというか）
フィルは知らずの内に口元が緩んでいた。それを見た男は目を細め嫌な笑顔をした。
「和んでいる中、水を差すのは申し訳ないんですが、そろそろ宿を

取りたいんですよね～、フィル殿下？」
「なっ！和んではいない！タカ、さっさと行くぞ！！」
そうしてフィルとタカは、男と少女から遠ざかって行った。

十四章（後書き）

なんか皆さん寝てばかりのような気がします・・・。どうでしたか、今回の十四章は。楽しんでいただけたら、光栄です

十五章

遠くで夜行性の鳥の鳴き声が聞こえる中、フィルと男一名をルエラが町から少し離れた雑木林に立っていた。
フィルはずっと険しい顔で黙り込んでいるのに対して、ルエラは笑顔の面を付けているかのような不気味な笑みを浮かべ、二人は互いを探っていた。
「・・・そろそろ本題に入ってよろしいですかね～？」
ルエラは痺れを切らしたのか、笑顔の面を外し本来の目を細めた狐のような顔をした。フィルは身構えたが、ルエラにその気がないと判ると先を促した。
「ふふ。あなたにしては穏やかですね～。まぁ、いいでしょう」
そうルエラは言い、天を仰ぎ月をみ、そしてフィルを見た。その顔にはぞっとするほどの冷たいものがある。
「私の用事はあの子の依頼。そしてあの少年の持っている指輪です。あの指輪を数年前奪えたのにあなたが邪魔をしたおかげで、こんな事になっちゃいましたよ、殿下」
フィルは警戒しながら答えた。
「だからなんだと言うのだ？一度は奪った物だ。貴様ならもう一度奪えるだろう」
「そうしたいのは山々なんですけど、あなたがすんなりやらせてくれないんですよ？だからわざわざ正面切って私が、この私が言っているのですよ」
ルエラの冷たい双眸がフィルの目線を捕らえ、にたり、と笑い「どうしてくれますか、殿下」と問いかけた。がフィルは冷静を保ちながら逆に質問した。
「私には貴様が躊躇(ためら)っている様に見えるのだが、気のせいか？」
「・・・質問に質問で返すのは感心しませんね～。そういう方でしたかな、あなたは」

いっこうに話が進まない。二人は沈黙の中、どんな想いでいたかは本人でしか解らないであろう。
先に口を開いたのは意外にもフィルだった。
「悪いがこれ以上だんまりしていても、しょうがない。今は退いてやる。しかし次は・・・あの時の真意を聞かせてもらう」
自ら背を見せたフィルだが、ルエラは大人しく見送った。悪意に満ちた顔とともに・・・・・・・

「おはようございます、フィルさん」
少女はタカとともにフィルを迎えた。フィルは少し不機嫌な顔をしてタカを見た。
「何故その子がいる？奴の、ルエラの連れだろう。奴はどうした」
「いや、どうしたって言われても・・・この子事三日ぐらい預かってね、って言ってどっか行った」
タカはフィルに真面目に答えた。フィルは内心呆れ果てていた。
「そうか。急ぎたいんだが、こうなってはしまったものは仕方ないな。三日ここに滞在するしかないな。いいか、タカ」
「ああ、俺はいいよ。あ、そういえば名前聞いてなかった」
タカは少女の名前を呼ぼうとして気づいた。未だ少女の名前を聞いていないということを。フィルもルエラから名前を聞いていなかった。
「あ、そうでした。私の名前は・・・リディアといいます」
リディアは丁寧にお辞儀をして、笑った。タカとフィルもつられてお辞儀をした。予想外にもフィルがお辞儀をしたのにタカもリディアも驚いていた。一番驚いたのが本人だということは触らないで置こう。
「・・・フィルさんを待っていたんです。一緒に朝ごはんを食べましょう？」
リディアは何事もなかったかのようにフィルに話しかけた。フィ

ルは笑われると思っていたのでこれにも驚いた。しかし、タカだけは笑いを堪えているであろう。少なからず肩が揺れていた。
「そうか。タカは腹が痛いのだな。残念だがお前は抜きだな」
「・・・はぁ！？なんでそうなんだよ！・・・わかりました。笑ってすいませんでした」
「わかればよろしい」
フィルは満足そうに頷き、その様子を見たリディアは笑った。鈴が鳴っているような澄んだ笑い声だった。

十六章

ルエラがいなくなって二日目の昼、タカとリディアは町にある酒場に赴(おもむ)いていた。そこにはハンターへの依頼の掲示板があるのだが、やはり子供だけでは酒場に入っただけで、からかわれてしまう。

「んだよ！俺はハンターだ！ちゃんとライセンスもある！」

「どこから拾ったのか、盗(と)ったのか・・・なになに。タカ・オリヴィア？」

男がタカのフルネームを読み上げると、周りの男たち（女もいるが）顔つき、雰囲気が変わった。それを察したリディアは不安になった。

「ねぇ、タカ。仕事はまたにしよう？なんかここの人たち・・・」

「大丈夫、大丈夫！」

タカはリディアの心配をよそに自信満々に笑って答えた。

「タカ・オリヴィアっていや、最低ランクGから最高ランクのSまで１００以上請け負って失敗は一度だけっていう、あの？」

皆タカを見ながら疑いの目を向けながら、口々に言った。

「おうよ！ま、ほとんどの奴は俺の事中年オヤジとか思ってるらしくて、腰抜かす奴多いんだよな」

そう言いながらタカは男からライセンスを返してもらおうと手を出した。

ホントに本人なのか？

そんな疑いの目をしながらも男は律儀にライセンスをタカに返した。受け取ったタカは苦笑いしながらライセンスをズボンにしまった。リディアはホッとしながら、タカを見て驚きを隠せないでいた。

「さて、と。まずは今引き受けてる依頼の結果を送らなきゃいけないんだよな」

―今引き受けてる依頼・・・・忘れてる方もいらっしゃると思いますので、ここで簡単に説明しましょう。

タカはある日少女から旅人が忘れた剣を持ち主・・フィルへ返してほしいという依頼を受けた。
大体このぐらいでしょう。詳しくは三章を読んでください―
タカはカウンターへ行き、バーテンダーに話しかけた。
「すいません。依頼成功の知らせを送りたいんですが」
「はい。ではこちらの紙に依頼主の名前、あなたの名前、受けた町を書いて、メッセージをどうぞ」
バーテンダーは紙とペンを出し、指で指しながら説明した。タカはバーテンダーの指を目で追い、説明し終わるとペンを片手にさらさらとスムーズに書き終わり、タカは満足そうにしながら、終わりました、と言うとバーテンダーは
「はい、これで結構です。それではこの紙を明日送ります。もし次の依頼を受けるのでしたら、あちらの掲示板から選んでください。選びましたらお手数ですがこちらへ来て下さい、手続きをいたします。この町では手続きをしなければならないので、よろしくお願いいたします」
タカはカウンター近くにある掲示板に近づき、見た。その後ろをリディアがついてく。
「三つも掲示板があるんだ。えっと、魔物退治に探し物に、運び屋？」
「ああ。探し物ってのは人・物とかだな。運び屋はそのまんま。依頼主から頼まれた物とかを運んで相手に渡すのが仕事。魔物退治は読んで字のごとし」
リディアは掲示板の種類を見て首をかしげた。タカは分かりやすく説明をする。本当に簡単に。リディアは説明を聞いてなるほど、とつぶやいた。そして新たな質問をした。
「ねぇ、依頼主はお金を払うんだよね。いつ払うの？」
「人によって様々、だな。前金を貰って成功したら残りを貰う。失敗した場合は前金を返す。運び屋の場合は依頼主じゃなくて相手が払うって変な場合もあるし、魔物退治は騙す奴もいるかもしれない

から倒した魔物の首やらの証拠を持って成功したって証を見せてその場で貰うか、後日取りに来るって奴もいるな」
タカは言いながら魔物退治の掲示板を見て品定めしていた。リディアはタカを見ながら聞いていた。その顔は興味津々で楽しそうだ。
「へ～。あ、タカはどのタイプなの？やっぱり前金を貰うほう？」
リディアは笑いながら聞いたが、タカは引っかかった。
「やっぱり？俺って金にこだわる奴に見える？」
「うーん。ほらさっき依頼数は百以上だって聞いたから、そんなにお金に困ってるのかなって聞いてて思ったの」
それを聞いたタカは溜め息をついた。
「あのな～。俺は別に金欲しさでハンターやってる訳じゃないんだよ。自分の腕を上げるためにやってんの。あ、でも全くいらない訳でもないぞ？メシ代とか、剣の手入れにも欲しいし、いろいろあるから」
タカは最後に言い訳っぽく付け足した。リディアはくすくす笑って、頷いた。
「うん。わかった。ごめんね。あ、ねぇこれいいんじゃない？丁度この町の依頼だよ？」
「へ？あー、だめ。これ条件付だ。ハンター二人以上だよ」
「なら私が付いていこう」
そう声が後ろから聞こえた。振り返るとフィルが立っていた。

十七章

「私がってフィル、ハンターライセンス持ってんのか？」
「心配無用だ。ちゃんと持っている。信じられないか？・・・これが私のライセンスだ」
　フィルがコートの中から出したカードをタカはまじまじと見た。そのカードは紛れもなくハンターライセンスだった。
「本当だ。しかもプラチナだし」
　プラチナというのはハンターライセンスの階級を表している。四段階あり一番下がシルバー、三番目がゴールド、二番目がプラチナ、そして一番上がマスターとなっている。タカの現在の階級はフィルの一個下のゴールドだ。
　タカは悔しそうにフィルを見た。まさかフィルがハンターだと思わなかったのもあるが、プラチナ階級のフィルの名前さえ知らなかったという事実に悔しさ半分、腹ただしい気持ちを抱えていた。一人リディアはよく分からなかったため、遠巻きで見ていた。二人の話が途切れたのを機にリディアは口を開いた。
「あ、ねぇ二人とも。この『大切なペットを探してください。報酬は応相談』っていうのがあるよ。これにしない？」
　フィルは無言のまま掲示板を見る。しばらくリディアのおすすめの記事を読んでいた。タカはそんなフィルをじーっと、品定めをするかのように頭のてっぺんから足の爪先を見る事を繰り返していた。
「・・・・・・タカ、そんなに気になるのなら、ちゃんと説明しようか？何を聞きたい」
　タカの痛い視線を感じながらも、ほっといたフィルだが、我慢できなくなり意外なことにフィルが質問、そして知りたいことがあるなら質問しろと言ってきた。
「・・・君には関係ないことだ・・・っていつも答えないくせに」
「私が答えられる範囲なら答えよう。君には関係ないと思ったら答

えない。これでいいか？」
　タカはフィルの真似をしながら文句を言ったが、フィルは無視して言いたい事だけを言った。隣に立っているリディアが声を堪えて笑っているのが見えたタカは、フィルの眉間にシワが寄る真似をする。フィルはそれを見た途端表情を変え、あの夜の時の様な冷たく何をするか分からない顔をした。
「私は真剣に言っているのだが君は人の真摯を無気（むげ）にするのか？」
「あ、ごめん。・・・・・えっと、とりあえずその、表情はやめてくれないか？話しにくいし、周りの奴らも手を武器に回してる奴いるし・・・」
　タカは周りを見ながら言った。フィルは少し考え、まずは話をしてから仕事の請け負いをしようと言った。タカもリディアも反対はしなかった。反対できる雰囲気ではなかった。

「それで、聞きたいことはあるか？先に言ったが、私が答えられる範囲しか答えない。いいな」
　タカ達は宿の部屋に行き、フィルは部屋にあるテーブルに荷物を置き椅子に足を組んで座った。タカはフィルと向かい合う形でベッドに座る。リディアはタカの隣に行儀よく足をくっつけ座っていた。
「えぇと、何でハンターをやってんだ？・・・・・・・わかった、質問を変えるよ。どのくらいの数の仕事をこなしてきたんだ？」
「さぁな。お前以上の数をこなしているし、失敗も一度もないな、記憶にある限りでは。だからといって階級は数でもない。それは分かっているよな」
「あ、うん。・・・・・・じゃぁ・・・いつからハンターをやり始めたんだ？」
　タカは言葉を慎重に選びながら、口を開けたり閉めたり時には固く結んだままの状態もあった。
（少し厳しいか？仕方ない、積極的に答えるか）
　フィルはタカを見て溜め息をついた。いつもならタカが反応する

のだが、先にリディアが反応し困った顔をしてフィルを見た。
「いつからと言ったな。お前と同じぐらいだ。正確には覚えてないがな」
フィルはテーブルにある水差しから水を、同じくテーブルにあったコップに水を注ぎながら言った。一口水を飲み一息ついて、また口を開こうとしたが、タカが思い切ったことを口にした。
「なぁ、フィルの過去を聞きたいんだけど・・・言いたくないことは省いていいからさ」
この質問にフィルは驚きもしなかった。
「やはりそうくるか・・・。まず何から話そうか・・・・・」
「あのさ。殿下って呼ばれてたろ？関係あんの？」
フィルはタカの目を見ながら言葉を選びながら言った。
「私は今は亡きフィール皇帝の息子だ。といっても、知らないだろうな。知っている者でも避ける話題だからな。・・・私の父フィールは、剣の師でもあった・・・・・・」

十七章（後書き）

初の二作連続投稿です！・・・どうでしたでしょうか？次のお話はフィルの過去が明らかに！！・・・二回に分けて書こうと思っております。間にはタカやリディアの心境なんかをつづっていこうかと・・・。楽しみにしていただけると、作者としても嬉しいです

十八章

今から遡(さかのぼ)る事約十五年。

「父上！今日こそは父上から一本取ります！」

私は少しばかり長い剣を持ち、皇帝であり父でもあるフィールを見上げながら言った。

父は三十後半にして皇帝の座にいる者だけあり、その顔には威厳があった。髪は黒に近い紫で瞳の色は両目共に紫だ。目と眉はすっと伸びており、鼻も高く、口は形よく、固く結ばれていた。それ故か、厳しい感じがありあまり表情を変えない人だった。そして赤い豪華なマント、機能にも外見にも抜群な服装をしている。腰には大剣が下がっている。この大剣でいつも軽々と振り回している父を、私は格好いいと尊敬している反面、悔しい気持ちを持っていた。

「ふははは！そうか、この俺から一本取ろうってか！はははは！いいだろう、職務が終わったら相手をしてやろう。フィルデリス、それまでに準備をしてこい」

フィルデリスというのは私の正式名だ。

父は外見は怖いが、口を開くと人当たりのいいおじさんだ。ただ、曲がったことが気に入らないとか、民の事に関してはしっかり自分の意見を主張し、その道をまっすぐ行く人だ。

「絶対ですよ、父上！それでは先に行っております」

私は元気に城の第二の庭と呼ばれている演習場へと走り去って行った。

―フィールはそんな息子を目を細めながら、見送った。側にいたフィールが皇帝になる前からの友人でもある臣下は微笑みながら、言った。

「まるで若い頃のあなたのようですね、陛下。殿下の望みを叶える為にも、仕事をきっちりやってくださいね？」

「おいおい、俺はまだ若いぞ？っと、ちゃんとやればいいんだろ、

全く口うるさい臣下だなお前は」
　フィールは職務をたくさん抱えていた。あまり得意ではなかった為か、臣下や執事の者たちに任せっきりだった。しかし皇帝の力がないといけないことも多数ある。今のように。
「しっかしな～、会議をやるのになんで元老院なんかが出てくるんだよ。こっちの問題なんだから「悪いな、私らも出たくはないのに出なきゃならない状況なんだよ、フィール皇帝陛下？」
　フィールが愚痴をこぼしていると、途中から若くはないがそんなに年老いた声でもない声が聞こえた。振り返ると、元老院が一人、クロフォードがいた。
「盗み聞きとはあんたも人が悪いね。クロフォード殿、お一人ですかな」
「ああ。他の連中はお前の顔を見るのが嫌なんだそうだ。随分と嫌われてるな、皇帝陛下」
　クロフォードはかつかつとフィールに歩み寄り気さくな笑顔を見せて親しみをこめてフィールに話しかけた。
「さて、嫌味はこれぐらいにして・・・本当に久しぶりだな、フィール。お前さんの奥さん、セリアさんにさっき挨拶に行ったが、お前さんの小言ばかり言っていたぞ。また何かやらかしたのか？」
「おいおい、何かって別に俺は何もしてないぜ？あんたに久しぶりに会えたから、溜まってたもんが一気に出たんじゃないのか？」
　フィールはクロフォードの話を信じられないといった口調で否定した。それでもクロフォードは厳しい顔をしたままフィールを見つめていた。気まずい空気が当たりに漂っていたのを何とか取り払おうと臣下が口を挟んだ。
「あの、すみませんが、そろそろ会議の時間が・・・」
　二人はその言葉で今は言い争っている場合ではないと思い大広間に急いで向かった―
「・・・父上、遅いな。もう準備はできてるのに」

私は防具をしっかりつけ、固めの茶色い手袋をつけて、演習場で父を待っていた。だが、一時間経った今でも父の姿は見えない。私は不機嫌になりその場にしゃがみこんだ。顔を地面に向けていると影が私を覆った。

「父上！遅いですよ！」

私はそう怒鳴りつけながら顔を上げるとそこには父ではなく、同い年のルエラが驚いた顔で私を見ていた。

「あ、すまないルエラ。まさか君が来るとは思っていなかったものだから」

私はすかさず謝った。殿下ともあろう物が家臣に頭を下げるのはいけないことだと執事に怒られて以来、私は一度も頭を下げなかった。しかしこのルエラだけは何故か頭を下げなくてはならない気がしていた。それは何をされるか分からない恐怖があったからだ。

するとルエラはくすくすと笑った。

「フィル殿下、謝らないでください。私が先に声を掛けなかったのですから、悪いのは私の方ですよ」

「あ、あぁ。・・・・お前確か剣の腕がいい方だよな。・・・よし、父上が来るまで相手をしてくれ。ただし、本気でかかってこいよ」

当時の私は天狗になっていた。父から教わっていた事が原因だろう。悪いことではないが、私は己の力を過信しきっていた。

「分かりました。本気でお相手致します」

そう言うな否やルエラは腰にある細身の両刀の柄に手をかけた。全身からは並みならぬ気迫と殺気を感じた。私も負けじと気を奮い立たせ応戦した。

私とルエラは駆けた。お互い剣を抜き、相手に入れることだけを考えていた。少なくとも私はそう思っていた。

ルエラの右からの攻撃に私は半身ずらし避け、しゃがみ込みながら横薙ぎに剣を振るう。ルエラは左の剣を地面に突き刺し防いだ。そんな攻防がしばらく続いた。体力的には、ルエラの方が有利だった。次の攻撃を防ぎっきれなかったら、負ける・・・そんな思いが

頭をよぎった。ルエラはそれを見逃さなかった。一気に間合いを詰め私の剣を弾いた。そこまではよかったのだ。しかしあろう事か奴は私をそのまま押し倒し、剣先を私に向け下ろしてくる。もうだめだと息を飲んだ私は次の瞬間呆然とした。

「っ！・・・間に合った。ルエラ、フィルから離れろ。今すぐ・・・！」

父がルエラの剣を素手で掴んだのだ。私は緊迫した空気に滅入ったのと、安堵感で、その場で意識を手放した。

十八章（後書き）

この後書きまで読んでくれて、ありがとうございます。そして、ごめんなさい！や、やっと、更新できました…！約一ヶ月放置してしまいました・・・。一人称での進行は初めて書いたので、めちゃくちゃ戸惑いました……。なので、おかしいな、と思ってもスルー又は、ご意見を下さい。しかし、どうもこの小説は繋がり過ぎてますね（苦笑）　次回は息抜きな感じです（多分……）。次回も読んでくれると有り難いです

十九章

フィルは一度休憩をしたいといって部屋を出た。
「まさか、フィルが皇帝の息子だったとはなー。ルエラだってあいつの家臣って、有り得ねぇだろ」
「・・・そうかな？私、ルエラさんと一緒にいたけど、言葉遣いとか仕草とかすごい丁寧だったよ」
タカとリディアはフィルがいなくなると顔を見合わせた。タカは腰を上げて伸びをした。リディアは何かを考えるように難しい顔をしていた。
「ね、タカはどうしてフィルの事をそんなに知りたがるの？」
リディアは意を決して聞いた。タカは背中ごしにぴくっと震えた。
「・・・・なんでって、そりゃあ、あれだよ。その・・ほら、ね」
タカは目を泳がせていた。リディアからは分からないが、話し方でひどく狼狽していることが分かった。だからリディアはそれ以上聞かないことにした。
「じゃぁさ、剣は誰に教わったの？お父さん？」
「あーははは。親父は俺が四歳のとき、死んだ。だから剣は兄貴から教わってたんだ」
空笑いをしながらなんでもないように言った。それが哀しみを隠す為に言ったのは誰が見ても明らかだった。リディアは悲しい顔をして謝った。
「あ、ごめんなさい。私、「いいよ。気にしてないから。・・・いや気にしてなきゃ、フィルと一緒にいないか・・・・・・。なにやってんだろ、俺」
タカはリディアの言葉を遮った。が、自滅した。しばし沈黙があった。タカは短く息を吐き、扉を睨みながらしかし声は穏やかに言った。
「俺さ、十年前に母さんと兄貴を殺されたんだ。・・・・・・・・・

フィルに」
タカの突然の告白に驚きを隠せないリディア。
「フィルさんはタカの仇？で、でも、フィルさんがそんなこと・・・」
「・・・・はっきり言って俺もわからない。でも確かに俺の目の前で殺されたんだ。兄貴があいつに殺(や)られたとこを見たんだ。兄貴は俺をかばって・・・」
そしてまた沈黙になってしまった。どれくらいの時間が経ったのだろうか・・本当は短いのだろうが、嫌に長く感じた。二人はどう切り出していいのか分からず、押し黙っていた。そんな時救いのように部屋の扉が開いた。二人は宿の人だと思った。
「急に雨が降り出してきた。すまないがタオルを・・・どうした、二人とも」
部屋に入ってきたのは宿の者ではなくフィルだった。フィルはずぶ濡れでコートの下には紙袋があった。まるでその姿は一仕事終えた一家の大黒柱のようだ。
フィルはタオルを持って来てくれないか、と言おうとしたが途切れてしまった。二人がいや、タカは驚いた顔で、リディアは悲しそうななんともいえない顔をしていたからだ。だからフィルは問うたのだが、二人は黙ったままフィルを見ていた。フィルはいい加減びしょびしょのままでは風邪を引いてしまうし、濡れた服をいつまでも着ているのは嫌だった。だからフィルは黙って荷物をあさり、変えの服を持って、脱衣所へ向かった。この宿には一部屋ずつお風呂があるのだ。
（あの二人はなんの話したらあんな顔をするんだ？）
フィルは服を脱ぎながら自分が扉を開けたときの二人の顔を思い出した。いくら考えても他人の事など分からないと、勝手に解釈し黙々と着替える。
「さてと、タカ？君が一番知りたい時間(とき)の話をしようか。・・・覚悟はいいか？」

フィルは着替え終わってから肩にタオルを掛け、髪の毛から滴る雫を服に染み込ませないようにした。そして先程と同様に椅子に座り、長い足を組みタカの顔をまっすぐ見た。

「・・・あんたが、家族を殺した瞬間(とき)から、覚悟してた。今更覚悟なんて」

「こんな言葉を知っているか。時に真実は・・・残酷だ、と」

二十章

気絶した私を運んだ父は私が目覚めるまでベッドから離れなかったそうだ。
「ルエラは何と言っている？」
父は私が目覚めて、執事が来たのを確認して、稽古の事ルエラの事を言い出した。
「はい、それが殿下が本気を出してよいとおっしゃったので、本気を出したと本人は申しております」
その言葉に父は眉をぴくりと動かし、私を見ながら執事に聞いた。
「それは本当なのか？」
私に質問したとも取れる言い方だ。私が小さく頷くと同時に執事からも肯定の返事がかかってくる。父は小さく息を穿いた。幻滅したんだろ、そう思った私は俯いてしまった。
「…いいかフィルデリス。確かにお前の剣の腕は上がってきている。だがな、お前は経験不足だ。ルエラはお前と同じ年齢だが、あいつはたくさんの戦場に立ち、たくさんの人を…葬(ほうむ)っているんだ。その分あいつ自身、たくさんの傷を負った」
父は言い聞かせるように優しく尚且(なおか)つ強く、言葉を一度切りながら、私を真っ直ぐ見ていた。私と目線が合うとまた話始めた。
「あいつは基本など身についてはいない。だが、戦い慣れている。例え皇子であろうと、躊躇(ためら)いなく殺す。ルエラはそういう奴だ。いいな、あまり関わるなよ。それと、自分の力量を推し量るのもいいがもっと腕を上げてからにしろ」
そう父は言い、背を見せた。執事となにか話していたが、こちらまで聞こえなかったから、私は諦めまたベッドに横たわった。
「フィル殿下。夕食までおやすみ下さい。夕食の時間になりましたら、お呼びに来ますので」
「あぁ、わかった」

私はぶっきらぼうに答え、目を閉じ、深い眠りに入ってしまった。

その夜私はふと目覚めた。部屋は漆黒、窓の外を見ると夜更けのようだ。

「夕飯になったら呼びに来るんじゃなかったのか？」

私はベッドから出て、眠い目を擦りながら部屋を出た。だが、部屋を一歩踏み出しただけで、なにかいる、とはっきりと解った。目で見たわけじゃなく、第六感とか、本能とかで感じとった。

嫌な予感がする。

心臓がバクバクいって、頭も働かない。手足も動かすこともままならない。ふいに父の声が聞こえた、気がした。私は動かない足を叱咤(しった)して一生懸命走った。先にある角を曲がった。そして悪夢が始まった……。

曲がった先には誰かが倒れていた。暗くて判らない…だから私は近づいて、息を飲んだ。

「…っ…！なん、で。執事のあなたがこんなとろこで、血を流して…」

見ればもう死んでいると解っていた。けど、話し掛けずにはいられなかった。私は震える手足を動かして、父の下へ急いだ。走っている最中にも沢山の兵士など使用人の者たちが死んでいる。途中にある部屋を覗いて見ても、中に居る人は一人のこらず死んでいた。

やっとの想いで父の私室にたどり着いた。そこには父と父を庇い剣を握り、必死な背中を見せる、ルエラが居る。二人は窓を見ている。そこに誰か、複数居るが、こちらからは逆光で遠いから、正体は分からない。けど一つ解っている。

「お前達が、ここに居る人達全員殺したんだな！」

私はシルエット状になっている奴ら一殺人者を睨み声を上げた。父は驚いた顔をしながらこちらを見た。それでも父は懸命に声を荒げるのを堪え、また前を見つめる。それは有り難い、と思った。今の顔は憎しみで一杯の顔だからだ。

【フィール皇帝陛下。もはや貴方に用はありません。ここで命を絶ちましょう。このわたしの手で】
シルエットの中の一人が男は声を発した。よく通る声だ。多分こいつがリーダーだと思う。
「…俺はまだ死ぬ訳にはいかないんで、その申し出は却下させてもらうよ。さて、……」
父はルエラに耳打ちした。ルエラしか聞こえない程の小さな声だったから、私には聞こえなかった。
「…！いいのですか、陛下」
「あぁ、構わない。俺の命一つで済むのならば、たいした事ないさ」
父とルエラは意味不明な会話をしていた。内容的にはあまりいい話ではないだろう。その証拠に父は自分の命と口にし、ルエラの顔はとても複雑な表情をしている。
「さてと、準備はいいなルエラ。お前の事信用するぞ」
そう言うと、父は敵に走っていく。ルエラはこっちに向かって私の腕を掴んで、疾走する。
「な！？ルエラ、お前なんで！」
「今は黙ってわたしの言う通りにしてください。陛下の願い…貴方を無事、王都の外へ逃がし…国をまたまとめるようにすること」
ルエラの声は苦しそうだった。そして私はその苦しみが解っていたけど、父を見殺しにしたくなかった。だから私はルエラの手を振りほどこうとしたが、ルエラの手は力強く私の腕を掴んでおり、振りほどくのは困難だった。
「っ！ルエラ、わかったもう、戻って仇を取ろうとは思わない。だから！離してくれ！腕が痛い！」
私はルエラの腕を離すように抗議した。一瞬ルエラは戸惑ったが、優しく手を離してくれた。
「いいですね、貴方はあの方の息子。いえ、もう貴方は一人の男です。殿下として国の事を考え、責任を持って行動してください」
「…あぁ、解った。けど、これだけは言わせてもらう。俺はお前の

考えが全て正しいと、思わない」
　私はルエラの背中に強く話し掛けた。全て正しい事など、この世にはないと教えられてきた私にとって、それは当たり前で私自身そう思っている。
「はい。それで良いのです、フィル殿下。いや、フィルデリス皇帝陛下とお呼びした方が良いでしょうか」
「…いや。俺はまだ、殿下でいい。皇帝になるのはもっと先になる」
　私たちは城内にある地下通路を走り抜けた。少し光りが差し込んでいる。もうすぐ外に出る。
「絶対俺は、強くなって、ここに戻ってくる。そして、国を…。絶対に！」
　私はルエラに、私自身に誓いを立てた。

二十章（後書き）

二ヵ月…長かった…申し訳ありません！　過去の話が長くなります。ルエラの変貌…うまく書けないかもしれませんが、頑張ります！次回も見てほしいです。よろしくお願いいたします……。

二十一章

「あれか、ルエラ。叔父が住んでいる町は」
私とルエラはあれから数日をかけて、叔父の住む町へ歩いていた。着くまでにたくさんの魔物と遭遇し、たくさんの傷を負ったが、やらなければならない事がある私は、膝を折ることがないよう必死だった。
「はい。クラリス侯爵は今この町の領主をしています。…あまり口にしたくはありませんが、ご家族の中で信用できるのではないかと」
言いにくそうにルエラは私を見ながら言った。私はルエラの言い分は最もだと思ったから、頷いた。そして、ルエラは思いがけない事を言った。
「城を襲った輩の事なんですが：あの中に、貴方の兄上がいらっしゃいました」
「…！　そんなはずは…いや、しかしその可能性も無い訳では……。今は叔父の所へ行こう」
「そう：ですね。シルエル侯爵様ならきっとご協力してくださいますよ」
ルエラは私を励ます言葉を言ってくれた。私はその言葉に黙って頷き、町に入って行った。

町に入ると直ぐに、男と目が合った。男は少し考え、思い出したように頷いた。
「おぉ！　フィル殿下ではありませんか！　何故このような場所へ？　あ、クラリス侯爵にお会いなるのですね」
どうやら、私を見たことがあるみたいだ。男は私をクラリス侯爵の元へ案内しようとしたが、ルエラが制した。
「いえ。フィル殿下はここに着くまで、満足に寝ていません。ですので宿を案内してもらえないだろうか」

ルエラの申し出に男は素直に従い、私たちを宿へと案内してくれた。ベッドで寝るのは一週間ぶりだ。ベッドに横になった途端、私は今までの疲れが外に出て、激しい眠気に襲われ素直に深い眠り入った。

今思えばこの頃から、ルエラの行動・言動がおかしくなったのかもしれない。

「そうですか…兄上が殺されて……。お辛いかもしれませんが、お気を確かにお持ち下さい、皇子。私に出来ることは皇子を休ませることしかできません。私は兄上と違い、剣を苦手としてますのでお教え出来ません」

伯父は頭を下げた。私は少し困ってしまった。本当の事を言うと、直ぐにここを出て行くつもりだったのだ。

「悪いけど、私たちは直ぐここを出ますから。…殿下行きましょう」

ルエラは強引に私を立たせて、屋敷を出て行こうとする。

「え、ちょ、待てって。…ここはご好意を」

「貴方には時間がありませんよね？それに、貴方が殺される可能性無いとは言えませんよ。なにせ、陛下の兄上ですから」

「…ルエラどうしたんだ？　お前、あんなに父上のことを尊敬していたのに、あのって」

ルエラの目は冷たい目だ。私はその目を見た途端、城の皆を殺した奴らの顔が頭に浮かんだ。

「私は本当のことを言ってるだけですよ？　今は亡き陛下がどれだけ汚い仕事をしていたが貴方はご存知ですか？」

「やめなさい！　兄を、悪く言わないでくれ…」

叔父は声を張り上げた。その顔は哀しい顔だった。私はこの出来事で何も知らないのだと思い知った。それでも父のことを信じたいから、それ以上なにも聞きたくはなかった。

だから、私は言ったのだ。

「私は、ハンターになる。父上や、城の者たちを殺した奴らに、復讐する。そしてまた城に戻って再建したい」

叔父は驚き戸惑い、ルエラは微笑んでいた。その微笑みからは何を思っているかわからない。
「な、ならばここにあるハンター試験に受けるのですか？」
「それは無理ですよ、殿下。貴方一人の為には無理です。しばらく待ってください」
「私一人の為？　どういうことだ」
私は一人混乱していると、叔父が助けてくれた。
「ハンター試験は2年に一度しか行われないのです。そして一度落ちた場合は、再度受けられますが2回、つまり4年の間は受けられないものとなっているのです」
私ははじめて聞かされた事実に驚きを隠せなかった。それでも、私はハンター試験に出ようと心に決めた。

二十一章（後書き）

まだまだフィルの過去が長く続きそうな勢いの二十一章はどうだったでしょうか。感想などありましたら、気兼ねなくどうぞ。ではまた、次回に

二十二章

「では、最後の合格者を発表する。5番　フィル」
あれから、私は鍛錬(たんれん)に鍛錬を重ねハンター試験に挑んだ。その結果は合格をしたのだ。
「よかったですね、殿…いえ、フィル。これで晴れてあなたもハンターの仲間入りです」
ルエラが私に笑顔を見せながら言った。その笑顔はとても凍てついていた。それでも口調はいつものルエラだったから、私はいつもどおりに答えた。
「ああ。これで私もハンターになった。これもお前の鍛錬のおかげだ。礼を言う、ルエラ」

それから私は魔物退治を、探し物屋を、運び屋をいくつもの依頼をこなしていくうちにある噂をよく聞くようになった。その噂は私が追い求めてきたものだった。
「王家を滅亡に追いやった奴らは、あの反逆者だって言うぜ？　反逆者の中には、王家の奴が荷担したっていう噂もあるらしいぜ」
ある街のハンターたちが集う場所で私は、その噂を耳にし、発言した男を捕まえて詳しく聞いた。だが、その男は噂だからあまり信じないほうがいいと言い去ってしまった。
「噂…フィル、この噂をあなたは信じますか？　わたしとしては有力とは思えないのですがね」
「それはお前の意見だろう。私は今までたくさんの情報を得てきた。どうゆう情報が信じられるのか、区別はついている。あの男の情報は信じれるに値する」
断言をした私だったが、少し不安がよぎった。
「…解りました。ならば、あの男の言うことを信じましょう。あなたの言うことですから」

ルエラが言いたいことはつまり、私を信じるということだ。それは、私の不安を掻き消したのは明らかだったが、同時にルエラに対して、恐怖を抱いた。

「確かあの男が言っていた反逆者の1人が居るという」

「それが、タカ。…君の父親だ」

フィルはタカを静かに見た。タカは何を言われたか解らないという顔で、フィルを見ている。リディアは沈痛な面持ちで自分の手を見ていた。

二十三章

「反逆者の1人は、君の父親だ」
聞いていてもしかしてという気持ちはあった。でも信じたくなかったタカは気づかぬふりをしてフィルの話を聞いていた。その”もしかして”は残念なことに的中してしまったタカは、ただ呆然とフィルの顔を凝視することしかできなかった。
「……リディア、君のその顔だと知っていたみたいだな？」
フィルは動じないリディアに確認のように問いかけた。それに、リディアは素直にはい、と答えた。タカはそんなリディアの答えをどこか冷めた感情で聞いていた。だが、ふつふつと燃えがって来る感情がある。それは何だと悩む。否、それは問いかけなくても解っている。”憎悪”だ。
「んだよ、それ…。親父が…反逆者なんて！　それに、リディア！　何で知ってたの教えてんくんねぇんだよ！　俺だけかやの外かよ！！」
もう、タカ自身何を言っているか解らなかった。もはやただの罵倒に過ぎなかった。
「ごめんなさい。私、フィルさんとタカのこと…ずっと前から知っていたの」
リディアはただ苦しい顔をしてタカが納得する答えを探している。フィルはそんなリディアを見て、タカを見た。今のタカには何を言っても無駄なことは分かりきっているフィルは、頭を冷やしに言ってこいとしか言わなかった。
タカはしばらくフィルとリディアを睨んでいたが、部屋を出て行った。
「大丈夫か？　リディア」
心配そうにフィルはリディアに優しい声をかけた。ぴくっと少し

肩が揺れた。タカに睨まれて固まってしまったのだろう。
「はい、私は大丈夫です。でも…今は私より、タカが……」
数十秒間があったが、ちゃんと返事をしたリディアは部屋のドアに目をやった。その目は悲しみの色が見えた。
「タカは大丈夫だろう。少し頭を冷やせば冷静に判断できる奴だからな」
「まるで、タカのことをずんぶい前から知っているみたいな口ぶりですね？」
リディアはフィルに挑発めいたことを言った。もちろんリディアはそんな安い挑発に乗っかるほどフィルはばかではないと思っていたからこその挑発だった。
フィルはその挑発に乗ろうか迷っていた。もし、話をしていけば必ずリディアにも同じ質問ができることを予測していたからだ。しかし、あえて沈黙を返したのは言うまでもない。
「やっぱり、フィルさんって無口なんですね」
リディアは気分を害した様子もなく微笑んで、フィルの沈黙を返した。

「…くそ。なんでリディアが親父のこととか知ってたんだよ。普通におかしいだろ、俺と同じ歳くらいなんだぞ」
タカは宿屋を出て町を放浪していた。その足取りは頼りなく、ぶつぶつと独り言を言っていた。
そもそも「ずっと前から知っていた」とはなんだ？　そしてフィルのリディアを見るあの眼差しは……考えても次から次へと疑問が出てくるばかり。答えなど一向に出てこない。これでは頭がおかしくなると思って考えるのを一旦止めて、立ち止まって空を見上げた。
星がはかなく光り輝いている。
タカは静かに深呼吸をして、うしっと気合いを入れて宿屋に戻っていく。整理はついたようだ。その顔は覚悟に似た面差しだった。
「……やれやれ。また騒がしくなりそうだ」

フィルは宿屋の廊下からばたばたと足音が聞こえてくるのを、部屋で聞いていた。口では憎まれ口を叩いてはいるがその口元にはかすかな笑みが見えた。
「タカは本当に大丈夫でしょうか？」
「心配はないと思うぞ。あの足取りを考えればたやすいことだ」
リディアの問いにフィルは難なく答えた。リディアは一瞬瞠目したが、微笑んで頷いた。
「フィル！　リディア！　さっきは悪かった！」
タカは部屋のドアをばんっ！と勢いよく開け、第一声は二人への謝罪の言葉だった。
二人は微笑んでタカを迎えた。
「別にいいさ。お前の疑問ももっともだ。私の言い方が悪かったし、タカの人の話を聞かないのも悪い」
「だよな、そうだよな…はぁ！？　それは言い過ぎだろ！」
タカはいつものようにフィルと話ができていたことに、心内でほっとしていた。そしてリディアへと目を移動させると、リディアもまた安堵しているような顔をしていた。
「…やれやれ。ところで、タカ。整理はついたのか？」
フィルの言葉で和んでいた空気が、少し張り詰めた。
タカは俯いて何度か顔を上げ、決心して言った。
「……まだ、親父が反逆者なんて信じれない…いや、信じたくない。けど、フィルだって嘘を言う様な奴じゃないのは一緒に居て分かるから…だから、今はありのままを受け止めようと思ってる。リディアだって全部知ってるから、俺に言うのが苦しいのが、なんとなく分かるから」
そう言って、笑った。少し無理しているが。

二十四章

「これから、どうするんだ、タカ」
フィルはそう言い、水を一口含む。
「…それは…わからない」
「タカ、指輪を出して。それが、導いてくれるわ」
リディアは凛とした声で言った。
“指輪”という単語が一瞬何のことを指しているのか分からなかったタカだが、はっとして胸を押さえた。その手の下にはひとつの指輪が下がっている。
そっとリディアはタカの手に自分の手を添えて、タカの目を見て再度言った。
「その指輪があなたたちと、私を導いてくれる。だから、指輪を……」
タカはリディアの独特の雰囲気に気落とされて、指輪をすごすごと出した。
すると、指輪が淡く光りだした。
―リ…キュール宮…殿…き…声を…聞いて……―
微かに女性の声が聞こえてきたが、断片的にしかわからなっかたが、聞き取れたものがあった。
「リキュール宮殿…って…フィル？」
「あぁ。宮殿に行くしかないだろうな。…タカ、リディア、巻き込んでしまうが…」
フィルはタカとリディアを見て、言った。
「不本意だが、ここまで関わった君たちを放って行くわけにもいかない。それに、私の力では成しえないことも君たち二人ならどうにかなるかもしれない」
その言葉にタカは少し顔を赤らめ、リディアは微笑んだ。
「おう！　俺に出来ることなんてたかが知れてるけど、協力するぜ

！」
「ええ。私なんて足手まといは確実だけど。一緒に連れてって行ってもらえるとありがたいわ」
こうして、次の目的が決まった。

今まで、フィルが自分の過去を語ったことがなかった。そんな必要はないと思った故にだった。家族の復讐に男の過去なんて関係ないからだ。でも今は言ってよかったとフィルは思っていた。そして、タカも言ってくれたことが嬉しく感じた。
「今度は私の番…よね」
リディアは静かに言った。
タカとフィルは予期せぬ出来事に少なからず驚いていたが、フィルはそれに反対した。
「言いたくなければ言わなくていい。無理に言ったとしてもそれに、お前は納得できるのか？　私が言ったのは、今のタカに話しても大丈夫という核心から来たものだ。まぁ、多少はうろたえたと思うが」
そんな言葉を聞いてリディアは躊躇(ためら)ったが、それでも今言わなければ後悔する、と言って話し始めた。

「私は、その指輪の持ち主の…妹です。私の姉の名前は……アグライア」
「…！！」
タカはリディアの言葉を聞いてすぐさま、胸に下げている指輪のペンダントを握り締めた。思い浮かぶのはクロ爺の言葉。
『名前に古代文字…アグライア…輝きと言う意味』
「なるほど。道理で…」
フィルは一人納得している。そんなフィルをおかしく思い、疑問を投げるリディアに一呼吸おいて答えた。
「…君とライアの顔が似ていてね。最初ルエラの側に居たのはライアかと思ったが、君だったんだよ」

「な、なぁ！　アグライアとリディアってフィルとどんな関係なんだ？」
「どんな関係だと言われてもな…リディアと私の関係は従姉妹だ。それよりも、これからリキュール宮殿に行くんだ。それ相応の時間と力が必要になるぞ」
「相応の…。やってやるよ！」
二人はお互いにうなずきあった。
リディアは悲しい顔をして、俯いた。

どうか、姉が無事であるように…。そして、フィル殿下、タカも死なないで…
リディアは切に願った……

二十四章（後書き）

更新が遅れて大変ご迷惑をおかけします。作者の都合上、申し訳ありませんが、この章で第一幕を下ろさせていただきます。中途半端になってしまいますが、ご了承ください。　第二幕が出るかわかりませんが、頑張ります。ここまで読んでくださってありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0816b/

まだ見ぬ強さ

2010年10月8日15時03分発行